

40 を過ぎて知った自分についての事実

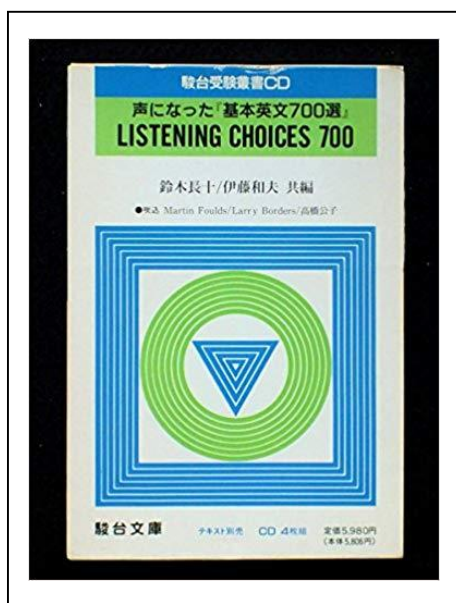
つい数年前まで、自分が読み手だと思っていました。もしドラッカーの指摘（読み手か聞き手か）がなかったら、一生読み手だと思い込んでいたのは間違いありません。

今にして思えば、読み手優位の学校教育に過剰適応した結果だったことが分かります。ペーパー試験で学力が測られるとの信憑をもつ社会では、どうしても読み手が有利になるからです。本当は左利きなのに、環境からの強い影響で、自分を右利きに仕立て上げてしまったようなものです。かっこよく言えば、ギタリストのジミ・ヘンドリックスのようなものです。微妙な違和感が去ることはありませんでしたが。

例の指摘で、改めて自分がどんなときに情報の表情が読み取れるかを考えてみたのです。小さい頃、先生の話はわりに憶えているのに、教科書の情報はなんとなくストレスだったのを思い出しました。テキストを深く読むのは嫌いではないけれど、ざっと読もうとしても入ってこないのです。自分が聞き手だと分かった瞬間は、かなりの解放感がありました。

ほかにもいくつかあります。高校時代から 60 年代のロックを毎日聴く日々を送っていました。アメリカの音楽ですからもちろん歌詞はすべて英語です。目で見ると何となく重たいのですが、耳から入ると何度か聴くと憶えているのです。意味としてというよりも、リズムで入っている感じでした。

受験勉強でも似た経験があります。あの頃、英語の定番というと——あの当時でも十分古かったのですが——『基本英文 700 選』という参考書でした。参考書といっても、2 から 3 センテンスくらいの英文が 700 並んでいるだけという味も素っ気もない代物でした。その参考書を全部憶えている人がいるという噂を聞いて、そんなことがあるのか、いや何の意味があるのかと思ったものでした。たまたま書店をぶらついていたら、この本のリスニング版のテープが売っていたのを見つけたのです。8 本くらいのテープがプラスチックの箱に入っていて、安くはありませんでしたが、親にお金をもらって買いました。ネイティブがひたすら朗読していただけという輪をかけて素



っ気のない代物でした。暇なときや疲れたとき横になって聴いていたら、いつしか 700 全部憶えているのにびっくりした記憶があります。

さらには、長文読解を勉強しようと思って買った教材にテープ付きのジョン・F・ケネディによる大統領就任演説、キング牧師の「私には夢がある」の演説も同じ頃ぼんやり聴いていたら、ともに結構な長さがあるものなのに、気づいたら全部憶えていました。父が英語の教師だったので、何かのときに最後まで何も見ないで朗読したらさすがに驚いていたのを憶えています。もちろん現在はすっかり忘れてしまいました。

年をとるほどに耳人間が有利になる

つくづく思い返せば、自分は典型的に耳人間、すなわち聞き手であることがわかったわけです。

この年まで気づかなかったことはある意味で残念ではあるのですが、悪いことばかりではありません。読み手としての力を要する局面はあらかた過ぎてしまったのですから、あとは聞き手であることを創造的に利用していこうと考えたのです。

ありがたいことに、老眼なのでしょうけれども、眼がつかれやすくて、とくに読み手でなくとも小さい字を追うのはなかなか大義です。若い頃は気負いもあってずいぶん厚手の本も読んだ気がしますが、今は一瞥もしたくない気持ちです。それと新聞を読まなくなりましたね。メディアが変化してきた背景もあると思います。だんだん小さい文字の方に目を合わせる文化自体がなくなりつつあるのでしょうか。しかも、眼という器官はよほどのことがなければ衰えていく一方ですね。その点、耳も多少は衰えるでしょうが、眼ほどではないに違いないのです。むしろ私は年寄りでありながら地獄耳の持ち主に何度も会った経験があり——父もまたその一人——、うまくすれば耳の機能は伸びていくのではないかとさえ思えるほどです。

そのようなわけで、現在私がどんなふうにして耳人間として情報や知識と向き合っているか、もしかしたら参考になるかもしれませんので、少しお話ししてみたいと思います。

テクノロジーによる救世主は **ipod** でした。十数年前、この小さな機器を手に入れてから、学び方が根本的に変わったといっているほどです。読み手にとっては、本という最強のメディアがあります。移動の電車の中やちょっとした時間のできたときに本は格好の暇つぶしとともに、知識獲得の強い味方になってくれます。



知的な筋力が弱っていなかった若い頃は、私も暇さえあれば本を取りだして見ていたのです。けれども、ipod が登場してからはスタイルに徐々に変化が生じてきました。

最初は自分でも気づきませんでした。まず最初に

起こったのは、学生時代に集めたのにほとんど死蔵していた音楽 CD が華々しく復活したことです。馬鹿みたいに埃をかぶっていたラックから CD を取りだして、インポートしていききました。手元に ipod にそれがどんどん収まっていくのが楽しくて仕方ありませんでした。軽く 2000 曲くらいは入れていったと思います。

かくして昔日を懐かしみながら、好きだったボブ・ディランやポール・サイモン、サザンや浜田省吾、尾崎豊など聴く日々がつづきました。今私はどちらかというコンテンツやメディアをつくる立場にいますから、高校生の頃と違って作り手の立場から気づけば聴いているわけですね。新鮮な驚きがいくつもありました。

しかしです。次第に飽きてしまいました。かえって 2000 曲以上も機器に収まっていても、聴ける時間には限りがあります。聴けないなら、ないのと一緒にです。とくに音楽は気分リンクしていますから、選択は意外に骨が折れるし、つかれるのです。

耳学問人生のスタート——ipod に遊んでもらう

眼をつけたのが朗読です。とりわけ古典です。『徒然草』とか『方丈記』とか『枕草子』とか、きちんと読みたいと思いつつも、多忙な毎日の中でなかなか手が伸びません。それならと思って、書店に行って、いくつか買ってきました。とくにお気に入り『徒然草』でしたが、これがひしひしとしみしてくるのです。読んでいるときには気づきもしなかったことが、何とてい、映像的に立体化して、ありありと眼前に表れるような気持ちになります。

あえてたとえれば、地図を見てもなかなかわからない土地の形状、微妙な起伏とか水や土の匂いのようなところが、耳から入ると手に取るようにわかる。というより、感じられるのです。書き手が筆を使いながら感じていたと思われる薄い葛藤のようなものまで感じ取れます。すごいぞと思いました。

しかも、聴くことのメリットは、内容の理解だけにあるのではないこともわかってきました。眼から入る文字情報は注目を要求します。人によって違うとは思いますが、私は本を読みながらほかのこと、たとえばテレビを観たりラジオを聴いたり人と話したりすることができません。とたんに内容が頭に入ってこなくなるからです。

ところがどうでしょうか。朗読を聞いているときは、ほかのことをしても何ら苦にならないばかりか、知らない角度から風が吹きこんでくるように、今までおざなりだったところを潤してくれるような爽快感があったのでした。散歩したり、掃除したり、荷物を片付けたり、雑務をしたり。何かを聞きながら行くと、驚くほど生産性が高いのです。とりわけ、会議中の私の生産性は驚異的に高く、誰かが何か滔々としゃべっているのを聞き流しながら、かなりの分量の雑文や企画書を書いてきました。前から何となく気づいてはいましたが、かくも自分にフィットしているとは思いませんでした。何歳になっても自分のことだけはよくわからないものです。

そんなこんなで、ipod に遊んでもらっているうちに見つけたメディアがあります。ネッ

トラジオです。たぶん 2010 年くらいだったと思いますが、ラジオの過去放送だけでなく、どこかで素人の方が吹きこんでアップロードしてくれたコンテンツが山のようにあるのを発見しました。今はそう呼ばれているかわかりませんが、当時はポッドキャストといわれていました。

ポッドキャストの番組では、当初は TBS ラジオの伊集院光やエレ片（エレキコミックと片桐仁）、久米宏などを好んで聴いていました。次第に関西系のディープなアマチュアのポッドキャストを聴くようになりました。血液型 ZONE とさんだへたれいでいおは今も聴き続けています。この二つを聴くようになって、世の中に対する見方が変わりました。そこには、感情のいきいきとした営みがありました。関西に住んでいる知らない人たちなのに、なんだか古い友人のように思えてきます。それはえもいわれぬ不思議な体験でした。

世界は美しい音で満ちている

そんなこんなで、耳から入ってくる情報を主たるチャンネルに切り替えたわけです。やがて一つのことに気づくようになりました。

私は聞き手なので、音にたいして敏感です。本を黙読しているときも、頭の中では言葉を音に変換しています。私の脳内のホールでは、いつも演奏会や朗読会が開催されているのです。毎時毎晩です。人の声もあれば、電車の揺れる音もあります。遠くで飛行機が飛ぶ音なども、ありとあらゆる音です。耳を澄ませてみて下さい。思いのほか美しい音で世界は満たされていることに気づかされます。世界は音の達人たちの演奏会です。

つまり何がいたいかというと、私が好んで読む文章は、音声的なものが多いというものです。私自身文章を書くときは、脳内で音に変換しています。嫌な語感のものはどうあっても使いたくありません。間延びした演奏もしたくはありません。なるべく、可能な限り、美しく聴覚に訴える文章を書きたいと願っています。

あえて刺激的な言い方を許していただけるなら、視覚は不寛容であり、聴覚は寛容であると言っていいかもかもしれません。私が読む本も、条件は同じです。誰にでも好きな音楽があるのと同じで、好きな種類の文章があります。そんな文章ならば永遠にでも読み続けられます。けれども、リズムが合わない文章や、主張内容に関心が持てない文章はまったく読み続けられません。苦役に過ぎません。たぶん読み手の人々は、読める文章のストライクゾーンも広いのでしょう。少々リズムやテンポの合わない文章でも読み続けられる人を私は何人も知っています。彼らは読む対象にたいして中立的な立場を維持できるのです。私は残念ながらそれができません。ただし、聴くときは別です。耳から入る情報は、よほど醜悪でなければ寛容に受け取れます。聴いているだけで何か楽しい、心躍るものがあるからです。こればかりはどうにもなりません。

微妙な違和感

さて、ここからがいくぶん恥ずかしい領域に入ってきます。

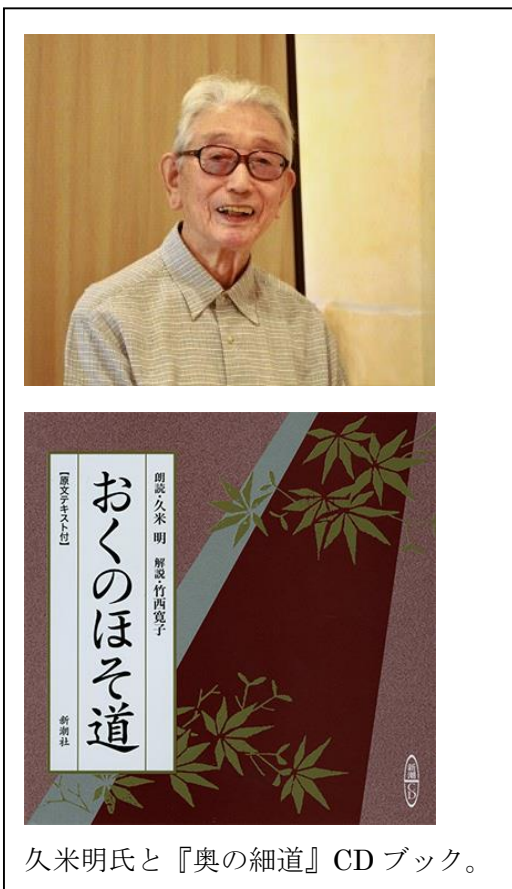
音声フリークの私として目につけたのは、図書館の CD です。私の地元の図書館は豊かな品揃えで、朗読はもちろんのこと、音楽はロック、邦楽、クラシック、とくにオペラの充実ぶりには驚かされています。多少安くなっているとはいえ、借りた CD をすべて無料でインポートできるなら、涙が出るほどありがたいことです。今まで払ってきた高い地方税を取り戻すつもりで、私は時間を見つけては図書館に行き、朗読の CD を借りることにしました。遠藤周作、松本清張、宮沢賢治、石川啄木、夏目漱石、森鷗外・・・、ずいぶんたくさん借りて、ipod に入れることができました。

朗読が聞けるようになったのはハッピーこの上ないながら、次第に妙な違和感を憶えるようになります。違和感の正体は何だったのでしょうか。声でした。

誰でもおなか为空いているときはとりあえず食べ物があればいい。けれども、だんだんお腹が満たされてくると、なるべく美味しいものやめずらしいものに気が向くようになっていく。同じように、朗読のコンテンツが不足していたときは、聞けるだけでうれしかったのが、だんだんと耳が肥えてきたのか、聞いていて、何か違うと感じる声が多量にでてきたのです。とくに聞き手にとって声は重要です。

楽譜と演奏の関係になぞらえることができるでしょう。どんなに作品がすばらしくとも、演奏がまずかったら台無しになります。けれども、少々作品に難があったとしても、演奏によってかえって不完全さが美的に聞こえることもあります(ちなみに、このことを村上春樹の『海辺のカフカ』で、シューベルトのピアノ・ソナタを題材に語っている場面があります)。朗読もそうなのです。しかも、声というのはごまかしがききません。文体であれば、少々の粉飾は可能です。美文的に展開することで、いくらか実力以上に見せることもできなくはありません。しかし、声というのはフィジカルなものだし、その人自身であるために、生理的にだめなものはだめなのです。

私の個人的な好みを言えば、男性、年齢は 60 くらい、やや低め、ゆっくりというのがあります。楽器で言えば、チェロでレガートを効かせた演奏が好きです。松尾芭蕉『奥の細道』の久米明さんの朗読は何度も聴きたくなる。けれども、



久米明氏と『奥の細道』CDブック。

朗読は自分で選ぶことができません。さらに根本的な問題として、私が聞きたい朗読コンテンツがないというものがありました。

次第に私は深刻なコンテンツ不足、教材の飢餓に悩まされるようになりました。聞く方が圧倒的に楽なのに、自分の読みたい本の朗読がない。そしてついに禁断の領域にまで足を踏み入れることになりました。今にして考えれば、あらかじめ定められていたことのように思われます。

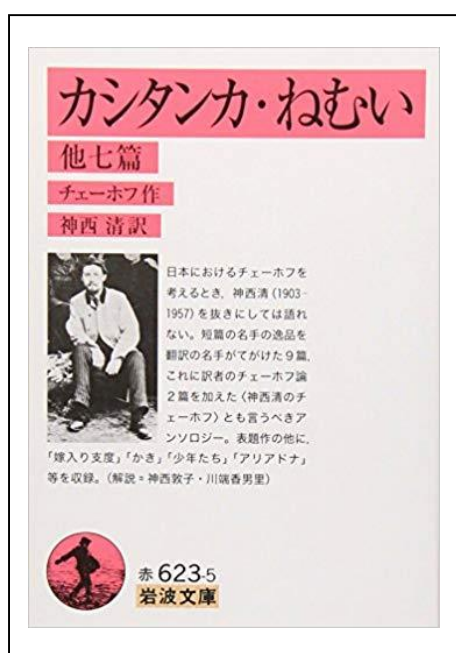
勘のいい方もーあるいは勘のさほどよろしくない方もーおわかりと思います。朗読を自作するようになったのです。方法は簡単。ICレコーダーで自分の朗読を録音して、音声を ipod に入れるという、それだけのものです。確か最初に試みたのは 2014 年くらいだったと思います。

ゆっくり朗読するのがいい

はじめのうちは朗読の勘所がよくわからず、少しでもたくさんテキストを読もうと早口で吹きこんでいました。けれども、聞き返してみると、速いのはどこか落ち着かないのです。やはりゆっくりと、文章のもつ滋味をかみしめるように朗読するのがいい。読んでいるときはちょっとゆっくりすぎるかなと心配になるくらいがちょうどいいのです。

最初に朗読したのはチェーホフの短篇でした。チェーホフの作品は、自分で朗読するのにちょうどいいコンテンツなのもよくわかりました。テキストで言うと 30 ページくらいですが、だいたいそれで 1 時間程度です。私の朗読のペースで言うと、目安は 30 ページです。これくらいが一回で朗読を完遂できる一単位だと思います。

実際にやってみるとすぐにわかるのですが、朗読は気力と体力のいる作業です。1 時間読み続けると、それなりに消耗します。けれども、後でそれを聞く喜びを励みに朗読をします。



ただし、家族からは不評でした。自室にこもってなにやら怪しげな呪文を唱えているように見えたのでしょう。不気味に思えるのもわからなくはありません。けれど気にしませんでした。自分で読みあげて、自分で聞く。これほどまでにテキストの滋養を徹底的に吸収する方法をほかには知りませんので。

しかし、考えてみれば、昔の人は素読といって、書かれた文章を声に出して読みあげたものなのです。しばしば言われる読み書きそろばんの「読み」は音読を意味していたはずですが、今も残っているかわかりませんが、私たちが小学生くらいの頃、国語の教科書を声に出して読んだ経験を思い出せない人はい

ないでしょう。あれは素読の名残だと思いますが、言葉を毛細血管から細胞のレベルにまでしみこませる上で最もすぐれた方法であったと思います。

何かを深く学ぶ上で、音読が実は最短の方法なのを昔の人は知っていたに違いありません。それをいったら、人が黙読するようになったのは、せいぜいここ 100 年くらいの話だと思います。それ以前は、誰もが、公共の場所だろうが、声に出して読んだものなのです。近代の印刷文化が人に黙読を強いるようになっただけのことで、今でも、人の学びの生理学上は音読の方がいいに決まっています。

私はチェーホフの短篇を幾つか朗読し、折に触れて聞くことで、耳からの学び、私の言うところの「耳学問」のとりこになってしまいました。文字どおりとりこになったのです。どうしてもっと早くこの世界に入らなかったのか悔やまれたほどです。

ただ私の見たところ、朗読に適したテキストと適していないテキストがあるのも確かのようにです。どちらかという、文学や哲学書、思想書など人文系のテキストは朗読に向いています。一方で、経済学や法学、自然科学系などややハードな知識は朗読に向いていないと感じました。数式や脚注の多いものも向いていないと思います。

とくにいいなと思ったのは、詩です。詩はもともと歌ですから、朗唱したものです。詩を黙読するのは、おそらく詩本来の目的からするとやや違和感を含むものかもしれません。昔好きだった詩集はかたはしから音読しました。聞き返すと、詩のもつ言語的な美感が絵画的にくっきりとまぶたに浮かんできます。言語に尽くせぬ至福体験でした。陶酔的な体験であったといってもいい。私はお酒を嗜みませんが、きっとお酒の陶酔に身を任せるのはこんな感じなのではと思われたほどでした。

聴覚はホット、視覚はクール



少し脇道にそれます。聞くと読むの受け手の側の知覚的な相違はどのようなものでしょうか。

マーシャル・マクルーハンは、ホットとクールという言い方をしました（一見するとわかりやすいけれども、なかなか違いのわかりにくい区分けであるのも事実ですが）。これにならうと、私のような聞き手にとっては、音声はホットなのです。ちなみにマクルーハンは逆だと主張していますが、私にとってはそう感じられるのですからしかたありません。おそらくマクルーハン自身が目人間だったのと、北米という近代文明はどうしても視覚優位に傾きがちなのですから、やむをえません。

私にとっては耳から入る情報は、どんなものであ

れ一定の熱度を伴っています。とりわけ朗読をしていると、文章の熱度というか、熱度が、何かの物質に手を触れたのと同じくらいははっきりと理解できます。熱度の正体が何かはよくわかりませんが、書き手の思いというか、訴えたいという意思の強さのようなもののようにも感じます。あるいは、朗読してみると、書き手の心にあったと思われる内面的葛藤や推敲時のさざなみのような感情まで読み取ることが可能です。

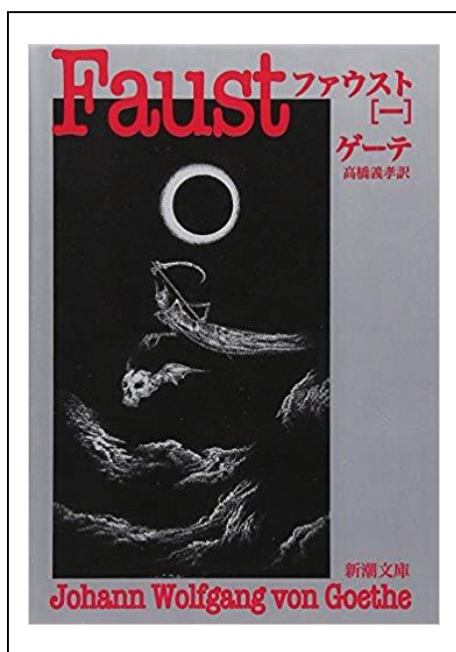
さらに脇にそれるかもしれませんが、同様の熱度は、翻訳によってなぜかさほど減衰しないもののようです。私は英語を日常語としておりません。完全な外国語であり、ほとんど記号の羅列のようなものです。それでも、ある英書と別の英書を読み比べれば、なぜか熱度の違いははっきりとわかります。あまり聞いたことはないのですが、おそらくある本を翻訳したいとやむにやまれぬ気持ちになることがあるのは、たぶんど翻訳者にとっても、この熱度を感じるためではないかと思えてなりません。そして、熱度を受け取った翻訳者は、なるべく熱度を維持して日本語を探しますから、翻訳された後の文章も原文の熱度を巧拙の差はあれ維持していることが多いのです。翻訳者の本当の仕事はそこにあるのではないかとさえ思われるほどです。

ですから、チャーホフの翻訳作品を朗読して聞いてみると、作者の熱がやはりひしひしと伝わってくるわけです。文章の中に燃えている火とでも言えばよいのでしょうか。

同じことはゲーテやボードレールでも感じたことです。二人ともに学生時代に一読した作家です。二十歳過ぎくらいだったのでしょうか。ボードレールには共感できたのですが、ゲーテの『ファウスト』にはあまり共感できた記憶がありません。なんだか、複雑な抽象画をいきなり見せられたような、思考のまとまりのつかない、取り散らかったような読後感だったと思います。

それが数年前に、朗読して聞いてみるとまったく印象が違うのです。壮大な、超長編のスペクタクル映画を観るような、お腹の底から熱いものが込みあげてくるような鮮烈な体験でした。次から次へと登場する異界の存在、悪魔と人間の駆け引き、それは地中海文明から北欧文明までを一気に鳥瞰しつつ駆け抜けるような神秘体験に等しいものだったのです。

その意味するところは何でしょうか。少なくとも私にとっては、本を黙読する行為は、クールな外的体験であり、音読することは、ホットな内的体験ということだと思います。マクルーハンが、知覚による刺激を外爆発と内爆発に分けて論じました。この整理にならうならば、朗読は内爆発を連続的にしかけていく行為であったように今では感じています。



なぜ「耳学問」に思いがいたったか

閑話休題いたしましょう。

なぜ世の中には聞き手と読み手がいるのかは私は知りません。確かなのは、聴覚優位の人（耳人間）と視覚優位の人（目人間）が存在しているということだけです。もちろん現実的には、右利きの人のごく自然に左手も使っているように、ハイブリッドなかたちで社会生活を営んでいるわけですが、利き手に似たものとして、情報へのアプローチは異なっているのです。

私は思うのですが、たいていの自分ではどうにもならない条件や出来事——経済学ではこのような現象を「所与」とか「外生要因」と呼んでいます——には、主に二つしか応答方法がないのではないのでしょうか。一つはどうにもならない事象を環境として受け入れること、もう一つは、同じ事象を創造的に利用することです。

聞き手か読み手かは誰でも簡単に、しかも創造的に利用できる要因の最たるものであることは、私の経験からも断言できます。反対に言えば、創造的に経験できなければ、右利きなのに左利き用のギターをもたされたように、たんなる不器用、へたすれば無能と見なされるだけに終わるのではないのでしょうか。恐ろしいことです。

蛇足になりますが、マーシャル・マクルーハンの『メディア論』にある、聴覚文明の復活という話も同時に脳裏をかすめたのを憶えています。私の想像では、耳人間のほうが目人間よりも古い、というかプリミティブな知覚の持ち主だと思います。昔の人たちは、『古事記』『万葉集』などに見るように、音声と聴覚だけで文化を伝承していったものなのです。まず耳で聞いて音声を体にしみこませ、語感やリズム、もっというと言葉の持つ神秘的な作用をも受け取っていたと私は考えています。

実際に、生まれたばかりの赤ん坊は耳から周囲を認識するという話ですし、人がこの世を去るまで聴覚は生きてると何かで読んだことがあります。

そもそも、私がこんなことを考え始めたのは、十年以上前のある出来事が原因です。ある老齢の元大学教授と、喫茶店で話をしていたときのことです。その先生は工学系のご専門で、読み手であったか聞き手であったかは今もってよくわかりませんが、ふとこんなことをおっしゃいました。

「最近、年をとって目が見えにくくなったんですよ。本や論文なんかはほぼ読めません。それどころか、新聞も読めなくなっています。今は高齢者が多い時代なのだから、ちょっとした読み物を朗読してくれるようなサービスがあれば、少々高くても喜んでお金を払うんですけどね」

なるほどなと思いました。たぶんポイントは二つあると思います。一つは、読むのは加齢とともにつらくなっていくのに、聞くのなら十分に可能であるどころか、むしろ楽な情報入手のアプローチとなりうること、もう一つは、どんなに年をとっても、知識や情報を得たいという欲求は衰えようがないということです。

私はその話を聞いて、いつか自分が老齢を迎えたとき、自分の朗読がたくさんストックされていたら、きっとそれに耳を傾けることが老齢の不自由を大いにやわらげてくれるのではないかと思いました。そして、それらは、老後の私にとって最高の贈り物になるのではないかとも思いました。私は事業家ではありませんからそれをビジネスにしようとは思いませんでしたが、一生学び続けたいと願っている人間ですから、まずメディアや情報の創造にかかわるものとして、自分にとって価値あるものかという観点からその話を聞いたのでした。朗読がしたいのではなく、朗読を聞きたいから、自分でつくってしまおうと考えたことになります。

つづく